

番号	75	住吉天神宮及び洪水水深記録碑		
所在地	伊万里市南波多町 水留 <sup>つづみ</sup> 1 1 3 6			
災害別	水 害			
目的別	伝 承	建立年	碑は平成 8 年 4 月建立	
特記事項	神社拝殿の柱に江戸時代からの洪水の水深を刻む			



伊万里市南波多町<sup>つづみ</sup> 水留の住吉天神宮の拝殿の柱には江戸時代から平成18年に至るまでの洪水の水位が刻まれている。最も古いものは寛保元年（1741年）の記録が刻まれている（後述の説明パネルには、古くは安政4年（1857）とあるが・・・）。また、最も水位が高いのは、安政4年（1857年）の水害で、鳥居とほぼ同じ高さである。

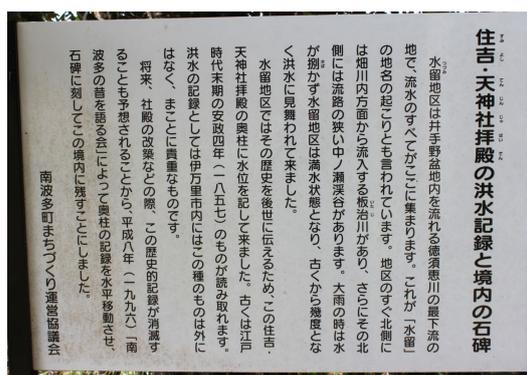
近年、社の敷地に拝殿の水位記録を写した「洪水水深記録碑」が南波多の昔を語る会によって建てられている。また、南波多まちづくり運営協議会により説明パネルも建てられている。

説明パネルによると、「住吉・天神社拝殿の洪水記録と境内の石碑」と題して、「水留<sup>つづみ</sup>地区は井手野盆地内を流れる徳須恵川最下流の地で、流水のすべてがここに集まります。これが「水留」の地名の起こりとも言われています。地区のすぐ北側には畑川内方面から流入する板治<sup>いたじ</sup>川があり、さらにその北側には流路の狭い中ノ瀬溪谷があります。大雨の時は水が捌<sup>きば</sup>かず水留地区は満水状態となり、古くから幾度となく洪水に見舞われてきました。

水留地区ではその歴史を後世に伝えるため、この住吉・天神社拝殿の奥柱にその水位を

記して来ました。古くは江戸時代末期の安政四年（一八五七）のものが読み取れます。洪水の記録としては伊万里市内にはこの種のもの外はなく、まことに貴重なものです。

将来、社殿の改築などの際、この歴史的記録が消滅することも予想されることから、平成八年（一九九六）「南波多の昔を語る会」によって奥柱の記録を水平移動させ、石碑に刻してこの境内に残すことにしました。南波多まちづくり運営協議会」と記されている。



また、神社の由来について、伊万里市のホームページにある「伊万里のお宝50選」から引用すると「住吉天神社は南波多町水留(つづみ)の波多(はた)川右岸の川辺に鎮座(ちんざ)します。祭神は天御中主命(あめのみなかめしのみこと)、高皇産霊(たかみむすびの)命、神皇産霊(かみむすびの)命の三柱です。もとは天神社でしたが、大正3年(1914)に

西にあった住吉神社を合祀(ごうし)しました。

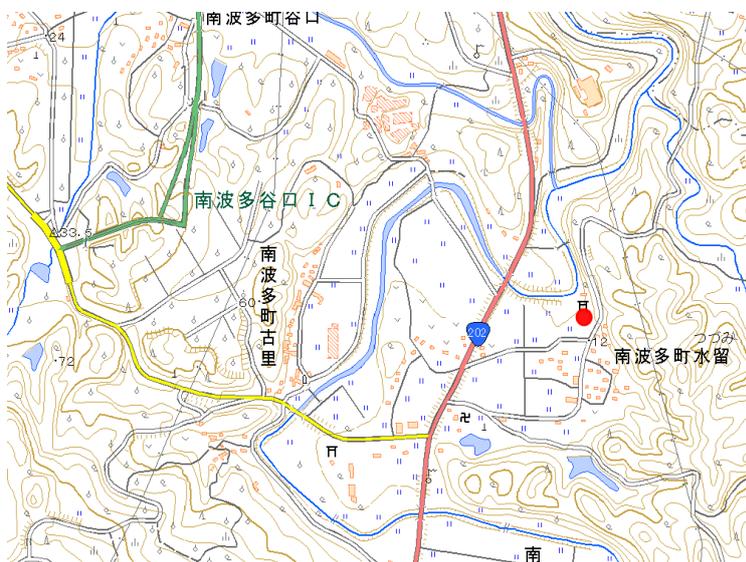
本殿と拝殿(はいでん)は木造瓦葺(かわらぶき)で、その時、再建されました。井手野盆地を北流する徳須恵(とくすえ)川は水留の集落を抜けると「中の瀬」の溪谷に入り、川幅が狭くなります。そこに板治(いたじ)川や志気(しげ)川が合流しているため大雨が降ると水かさが増え水留は水害が発生しやすいのです。住吉天神社には、江戸時代からの水害時の水位が拝殿の柱に記録してあります。水位を刻んだ石柱も建立されました。境内(けいだ

い)には本殿・拝殿のほか慶応(けいおう)3年(1867)4月再建のお籠(こもり)堂や川舟の発着所と物々交換の人寄せ場跡があります。」と記されている。



神社のすぐ裏手を流れる徳須川には、川船の発着所の跡らしきものも残っている。

また、神社に向かう参道の入口には、平成18年(2006)9月の洪水水深が電柱に記されており、それによると2.9メートルの高さまで水が押し寄せているのがわかる。



国土地理院電子国土 Web